

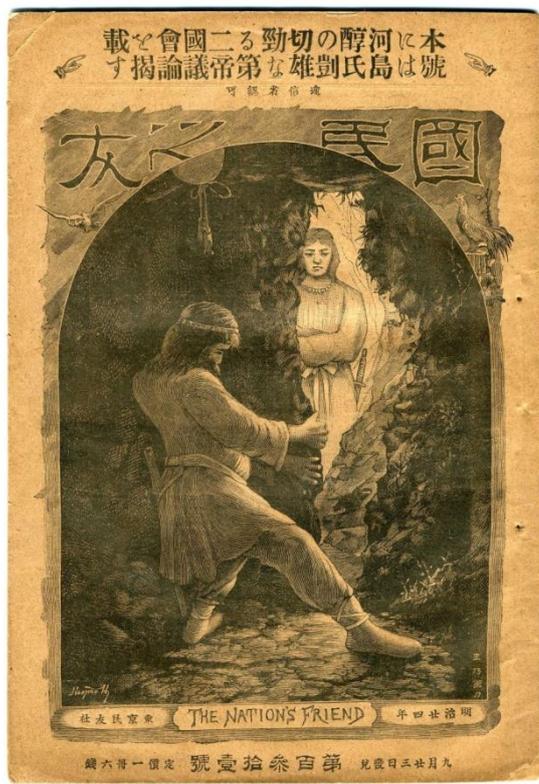
## 特別寄稿 二宮町の徳富蘇峰記念館をご存じですか？

塩崎信彦 (S41 生)

二宮町にある徳富蘇峰記念館は、明治から昭和にわたって活躍したジャーナリスト・徳富蘇峰(1863～1957)が、生前に交わした膨大な数の書簡を収蔵した記念館である。別名「手紙の記念館」とも呼ばれ、館内見学の他、12,000人からの約46,000通の書簡を目当てに大学教授や学生、研究者など、時には台湾や韓国など海外からも閲覧に訪れる。

ちなみに蘇峰と書簡を交わした平塚ゆかりの人物は、浜岳地区を中心に小川平吉(政治家)や平沼騏一郎(政治家)、河井醉茗(詩人)や河合亀太郎(実業家)など13名を数えた。

さて、徳富蘇峰という人物をご存じだろうか。熊本県水俣出身の言論人(ジャーナリスト)にして思想家・歴史家である。熊本洋学校から同志社英学校に入り新島襄より洗礼を受ける。東京銀座に民友社を設立し、総合雑誌『国民之友』と『国民新聞』(現東京新聞)で平民主義を提唱、一躍時代の寵児となる。



日本で初めての総合雑誌『国民之友』と『国民新聞』の創刊ポスター

その後軍国主義に転向し、第二次世界大戦時には「大日本言論報国会」の会長として、体制の意向に沿った主戦論で国民を鼓舞、戦後はA級戦犯容疑に。一方、34年間で費やしライフワークともなった『近世日本国民史』全100巻を晩年に刊行。現在も多く著名作家より資料引用される。新島を終生の師と仰いだ蘇峰だが、その師弟愛がNHKの大河ドラマ「八重の桜」で描かれたことは記憶に新しい。

小説家の徳富蘆花は5歳下の弟。江戸時代に生まれ1957(昭和32)年に95歳の天寿を全うするまで、一貫して「愛国主義」と「皇室中心主義」を唱導した。



弟・蘆花（右）とのツーショット写真



記念館来訪中のくまモン（2013年）

では、なぜ二宮町に弊館があるのかについて説明したい。熊本から上京した蘇峰は、赤坂、逗子、青山、大森山王と居を移した。大森の住居は大田区立蘇峰公園(山王草堂記念館)として整備されている。また、富士山を愛した蘇峰は山中湖に別荘を持った縁で山中湖畔にも記念館がある。他に生家の水俣市と旧宅の熊本市にもあり、当館を含め全国に5ヶ所の記念施設が存在する。

本題にもどりたい。温暖な地・熱海を愛した蘇峰は、毎年1～3月には避寒を兼ねて定宿「古屋旅館」や「熱海ホテル」に逗留するのが常であった。そして1943(昭和18)年、81歳になった蘇峰はついに念願の熱海へ転居し“終の棲家”とした。当時の秘書を務めた塩崎彦市(弊館創立者・筆者の祖父)も主に同行し、東京から熱海に程近い二宮に居を移した。蘇峰は自ら残した書簡など膨大な資

料を塩崎に託し、蘇峰の 13 回忌に当たる 1969(昭和 44)年に塩崎は邸内に記念館を竣工した。なお、蘇峰もしばしば訪れては探梅を楽しんだ付設の梅園は「かながわの花の名所 100 選」にも選ばれている。



熱海の晩晴草堂にて静子夫人と（1946 年）

次に、どのような展示を記念館で行っているかをご紹介したい。当館の展示室は 1 階が常設展として蘇峰の業績や足跡を、2 階は特別展として毎年テーマ性を持たせた展示を行っている。過去の特別展のタイトルを挙げてみれば、「書簡と資料から見た大東亜戦争」「世界に誇る東北の偉人」「手紙はアートだ!」「新島八重からの 6 通の手紙」展といった具合だ。時代や話題性を考慮して蘇峰への来信を中心に展示構成を組み立てるのだが、貴重な手紙をよくぞここまで残してくれたと毎回感謝の念を抱いての作業となる。特別展には毎年多くの来館者がある。1997(平成 9)年には、中曽根元総理が自身から蘇峰に宛てた 17 通の手紙を見に来館された。また最近では、ある皇族がご自身の親戚から蘇峰に宛てた手紙をご覧にお出でになられた。もちろん、熊本の誇るご当地キャラクター「くまモン」も郷土偉人の記念館を来訪してくれた。

先にも書いたが、見学の他に資料の閲覧を目的に来館される方が増えている。当館ホームページでは、書簡や図書など収蔵資料約 3 万 5 千点の検索が可能となっており、例えば「夏目漱石」を検索すると、漱石からの書簡はもちろん、漱石の友人や主治医などの情報も併せて調べることができる。最近特に多いの

は、「祖父の名前を検索していたら記念館のHPに行き着き、どうやら手紙が残されているようだ」といった類のものだ。別料金で複写し郵送するサービスも行っている。ぜひ興味のある人物をご検索していただきたい。

明治・大正・昭和の3時代の中心にあり、日清、日露、第一次、第二次世界大戦などの戦況を伝えた稀代のジャーナリスト・徳富蘇峰。その業績顕彰は当然だが、焼き討ち、関東大震災、東京大空襲の修羅場をくぐり抜けて今日まで残された貴重な日本近現代史の紙資料を、保存・活用する体制をどう整えるか。公益財団法人である私どもの急務であると考えている。そのため、未だ道半ばの収蔵資料の入力や、画像データの保存といった作業を進める予定だ。蘇峰が資料を託す際、秘書の塩崎に語った「将来の若手歴史研究家の史実解明の一助として欲しい」という思いを少しでも形にできるよう今後も専心したい。

(徳富蘇峰記念館・学芸員)



二宮駅での徳富蘇峰と塩崎一家（1951年、中央帽子が蘇峰、左が塩崎彦市）

\*写真はすべて当館蔵

●徳富蘇峰記念館利用案内●

住所：神奈川県中郡二宮町二宮 605（東海道線二宮駅から徒歩 12 分）

開館時間：10：00～16：00

休館日：毎週月曜日（月曜が祝日の場合は開館し翌平日休み）

入館料：一般 700 円 高校大学生 500 円 中学生以下無料

お問い合わせ：0463-71-0266 ホームページ：<http://soho-tokutomi.or.jp/>